

グレアム・グリーン『英国が私をつくった』について

On *England Made Me* by Graham Greene

岩崎 正也
Masaya Iwasaki

1

ラシャ張りのドアを通して意識した「生」と「死」をモチーフとして書き始めたグリーンが、またもや『英国が私をつくった』の中でアントニー・ファラントがイギリスの伝統から脱出することに失敗したこと＝死をテーマとして扱ったのは、おそらく作者の「人生にくり返し出てくるテーマがあるから」に違いない。

マホガニーの書棚に『パンチ』の全冊を揃え、シェイクスピア、スコット、ディケンズを読むアントニーの父は典型的なイギリス人である。父の信条は「感情をあらわにするな。純潔であれ。慎重であれ。借金は払え。掛けて買うな⁽¹⁾」であった。その父親をケイトは嫌い、アントニーは、父の権威とイギリスを離れ、10年間に世界を半周するほど各地をとびまわって、職種を次々と変えていくが、彼が足跡を印した上海、バンコク、アデンにはすべて英国の影があった。

彼が勤めるのはいつもだれかが彼の行く前に英国の片隅をつくりあげておいた所だった。東洋の売春宿でさえ英語が通じた。クラブもあり、ブリッジの会もあり、ネオ・ゴシックの英国国教の教会もあった⁽²⁾。

1935年に発表された『英国が私をつくった』は、作者によれば、「私と同世代にとってこの本に影を投げかけたイギリス国内の大恐慌と、ヒットラーの擡頭とのために暗雲のたちこめた中間期」を背景にアントニーとケイトの双生児の姉弟の近親相関的感情を主題として制作された小説である⁽³⁾。中村真一郎氏が言うように、この小説の制作意図が「現代の知識階級の青年の良心や教養と、与え

られた社会的環境との間の乖離から起る悲劇的なデカダンスを描こうとした⁽⁴⁾」ものであるとすれば、それを解く鍵は作者と同世代のアントニーやミンディーたちが生きた1930年代という時代と、30年代のイギリス人知識階級との関係を探ることにあると考えられる。なぜなら、30年代という「国境」を通してJ.P.クルシュレスタの言う「イギリス人である登場人物たちのナショナルな過去のもつ善とエリック・クログのインターナショナルな現在にある悪⁽⁵⁾」との二種の意識と風景を見ることが出来るからである。

2

見市雅俊氏がイギリスの30年代⁽⁶⁾について社会経済史の立場から述べている特徴のうち、このグリーン論に関するものとして次の3つを挙げる事ができる。

- (1) 経済状況としての大不況。
- (2) 政治としての共産主義とファシズムの擡頭。
- (3) 文化としての青春崇拜。

(1)について

見市氏は30年代のイギリス経済の特徴について「やや極端に言えば19世紀におけるイギリス経済の世界支配こそ、世界史の長期的視野でみればむしろ異例な出来事だったのでなかろうか」と述べたあと、「この時代は社会全体の生活水準が大きく向上した。30年代は失業と貧困の時代というよりも、全体的な豊かさのなかに失業禍という、いわばブラック・ホールがあったとみるべきであろう」と規定している。

(2)について

同氏によれば、政治的傾向の特徴として、30年

代に擡頭した共産党とファシスト勢力の運動は、その黨員数と影響力の少なさを考えると、「共にヨーロッパ大陸の最新の『流行』をとり入れた一種の社会風俗の域をこえることができなかったのである」。

この風潮に従って、グリーンはオックスフォード大学に入ってから、3、4ヶ月間学内の共産党に在籍した。『自伝』(*A Sort of Life*, 1971) によると、その動機は、「モスクワとレニングラードへ自由に旅行ができるというこじつめた考え方を⁽⁷⁾して」いたことだという。

(3)について

マーティン・グリーンは第1次大戦後、父親の権威とイギリスの伝統が持つ「成熟」、「責任感」「大人」という観念に反抗し、その代りに自分たちの若い男性的な生活様式を生み出した青年のグループを「太陽の子たち」と名づけ、そのグループをダンディー、ローグ、ナイフに三分した。三者の違いは、アドニス、ナルキッソスのギリシア神話に基づくダンディーが服装、態度、会話などあらゆる面で自己愛を發揮し、性的には同性愛を志向⁽⁹⁾するのたいして、ローグは、やはり責任感や成熟という大人の価値体系に反逆するが、残酷野卑で異性愛的な傾向をもつ。またナイフは自己形成のための価値やモデルを求めて変成の過程にある存在として自己を示すため、伝統的な「成熟」の傾向に服従しているように見えるという⁽¹¹⁾。

ナイフの例としてM・グリーンは、「30年代のナイフは共産党に入り、同志、活動家、黨員になろうとしているように見えたが、彼らの大部分はそうはならず、またなった人も一時的なものであった。というのは、ナイフとしても一黨員になったら自己のアイデンティティーを裏切ることになったからである」と述べている⁽¹²⁾。

「20年代のオックスフォードは勉学の場所ではなく、並はずれた無秩序の空想に耽る快楽主義の場⁽¹³⁾だった」ので、ダンディーの集まる「ヒポクリット」クラブではヴィクトリア朝のパーティが行われ、ヴィクトリア女王の衣裳を着て現れる者もいた。また「ルールウェイ」クラブのある少数の者は豪華な列車の旅を39年まで続けたという⁽¹⁴⁾。

他方のケンブリッジの使徒会の中では20年代から30年代の初めにかけて同性愛の傾向が強くなっ

⁽¹⁵⁾たという。

グレアム・グリーンについてM・グリーンは「観念的には彼は太陽の子たちの並はずれた態度を回避した」が「つねに彼の傾向には太陽の子たちの要素があった⁽¹⁶⁾」と言う。父である校長のいる学校からも、校長である父のいる家庭からも締め出され、国境に佇むグリーン⁽¹⁷⁾の立場が同世代の青年と比べ、特異な精神形成をグリーンに強いることになったと考えられる。

3

『英国が私をつくった』は1935年に刊行されたが、作者は、そのユニフォーム・エディションの扉に、「この書物の登場人物のうち実在の人物の性格を写そうとしたのは1人もない」と書いているように、たとえば、エリック・クログをイヴァル・クリューゲルをヒントにして造型しているけれども、登場人物をそれぞれモデルから独立した虚構の存在であることを強調している。しかし1970年に発行されたコレクティッド・エディションでは、同じ但書の他に新しく5頁にわたる序文が掲載されている。その中で作者は「アントニーの肖像にはたいへん満足している。長年にわたって彼に密着して暮してきたではないか。彼は私がよく知っている人を少し理想化した人物だ。私は彼と同じ体験を沢山持っていた」と述べ、さらに1980年刊行の自伝『脱出路』(*Ways of Escape*, 1980) に載せた先の序文と同趣旨の文章の中では、「彼(=アントニー)は長兄のハーパートを理想化した人物だ」と書き替えている。ここで登場人物とモデルの共通点について考えてみたい。

アントニーについて

- (1) 兎の皮剥ぎをしていたときに誤ってナイフでつけた傷痕が左眼の下にある。いつも良い背広を1着持ち、やせぎすだが、背が高くて、肩幅が広く、出身校を偽ってハロー校のスクール・タイをつけている。
- (2) 一度も定職につかず、明るく、女性に好かれる眼差しを持ちながら、身内から借金を重ねる金銭面でだらしない男。
- (3) 双生児の姉のケイトから見ると、弟は、自分がこれまで経験しなかったさまざまな「死」の

集合体である苦痛、恐怖、絶望、汚辱など「成功」以外のすべてだった。⁽¹⁹⁾

ハーバートについて⁽¹⁹⁾

ハーバートは、チャールズ・グリーンとメアリアン・レイモンド・グリーンとの間に生れた4男2女のモリー、ハーバート、レイモンド、グレアム、ヒュー、エリザベスのうちの長男である。45歳でパーカムステッド・スクールの校長に任命されたチャールズは、長男と次男を自分のパーカムステッド・スクールに入れなくてモールバラ校へ送った。ハーバートは卒業までそこに在籍したが、レイモンドは途中からパーカムステッド校に転入し、以後、グレアムとヒューは初めから父の学校に入学した。マイケル・トレイシーは4人の兄弟の性格を比べて、「ハーバートが家族の者からどちらかといえば愛想つかしの憐れみをかけられた失敗者だったのに比べると、グレアムは悩める天才、ヒューは謎、レイモンドは一家の中心だった」と述べている。ハーバートは家庭内では厄介物扱いを受けていたようで、小さい頃から無作法だった性質がモールバラ校入学によりさらに悪化したという。モリーは「子どもの頃どんなにハーバートを憎んだか、また彼が幼いとき子ども部屋の中でどんなに意地悪だったか」を語り、ヒューは、「ハーバートは信頼できない、非知的な、まったくの落伍者に思われた」と言い、グレアムは「もし神の恩寵がなかったら私がそうなるだろう」と嘆いた。しかし、いとこのパーバラ・グリーンは、兄弟たちとは違い、かなり好意的な見方をし、次のように言う。

振り返ってみると、彼のことは少しかわいそうだと思わないわけにいかない。彼は頭がよくなく、学校でも良い子ではなかったが、他の兄弟はみな頭がよかった。それに彼は美男子だったばかりにおばから甘やかされていた。クリケットに夢中になっていた彼は、たいへん優秀な一家の中ではごく平均的な人物だった。また家族からいつも軽蔑されていて好かれていなかった。しかし実際はときたま借金をする点を除けば、最も危害を与えない人物だった。彼が女の子から甘やかされたのはたいへんな美男子だったからだと思っている。心の底はじつに単

純で平凡な人間だったのだ。

一介の工員から身を起こしたスウェーデンの多国籍企業クログ社の創始者であるエリック・クログにとって経営の理想はスウェーデンのマッチ会社を世界的な多国籍企業に発展させたイヴァル・クリューゲルである。だから、クログはクリューゲルのように、「もし会社が失敗すれば躊躇せず自殺しよう⁽²⁰⁾」と考えている。

クログについて

(1) 株の買入れの日付をさかのぼらせるなど、不正な資金操作と併行して経理にさまざまな隠蔽工作を施す。

(2) クログは芸術作品にはまったく識見を持たないので、本社の円形の中庭にあるスウェーデンで一流の芸術家に造らせた彫像の出来映えに不安を抱き、門衛には来客にたいし、だれだれの作ただけ言うようにと命令を下す。

イヴァル・クリューゲル⁽²¹⁾(Ivar Kreuger, 1880-1932)について

スウェーデンに生れ、アメリカで建設業者として成功した後、祖国に帰り、「スウェーデン連合マッチ会社とスウェーデンマッチ会社とを世界的な独占企業に発展させ、43ヶ国で250工場を経営。クリューゲル・ツール社を二分してその一方を大戦に疲弊した国々を再建するために巨額の資金を貸付けるのに当て、その見返りに工業利権を獲得」。しかし経済恐慌による金融業界の破綻のためにパリで自殺。死後、不正な収支決算の全容が露見し世界中の株主に多大の損害を与えた。

4

13歳のときにセント・ジョン寮の寮生になってから、31歳のときこの作品を出版した後リベリア旅行の最中に「生」への救いを得るまで、ほぼ20年近くにおたる昏迷の歳月を地獄と天国との二重意識の葛藤に費やしたグリーンにとって、同世代のアントニーは自己の意識を等身大に小説化することができた人物であったに違いない。なぜなら第1次大戦後の「太陽の子たち」であるアントニーはイギリスの伝統から海外へ逃避したものの、異国の中の英国から他の英国へ移動しただけであり、

またグリーンもそれまでヨーロッパ文明の秩序に支配された土地を旅行したに過ぎなかった点で両者とも伝統の内側にいたからである。グリーンはリベリアへ行くまで「一度もヨーロッパの外へ出たことはなかった。またイングランドの外へ出たこともあまりなかった」と言っている。

ハロー校の同窓会にアイデンティティーを求めるスウェーデン駐在英國公使ロナルド卿、ハロー校のスクール・タイにアイデンティティーを見出すミンティーとアントニー、この3人とも英国のナショナルな伝統の世界とインターナショナルなクログの世界の両極を揺れ動いている。

アントニーは転職のたびに「辞職した」と英国の父親へ電報をうち、身内から千ポンドになるほどの借金を重ねる。しかし、弟の欺瞞を意識の上で感じることでできるケートにとってその電文は「首になった」を示している。イギリスの伝統を拒否しながら、自立できず、いつも英国の片隅にしがみついたアントニーは、図書館の古本を田舎で売り歩くとか、クリスマスの小包を1ヶ2ペンスで発送するとか、柄に炭火を入れた新案特許の傘を売るという事業を計画するのだが、いつも失敗に終る。暗闇の中でフランシスの恐怖の対象を意識に描くことでできるピーター、この両者の関係がアントニーとケートの間にも成立する。ケートはアントニーの意識を通して「失敗」を味わう。その意味でアントニーはケイトが体験したことの無い「死」のあらゆる位相の集合体である。

また、ケイトはアントニーにとって英国の「ナショナル」と真の意味で英国の影響下にない「インターナショナル」の両極を結ぶ国境であり、成熟できない「太陽の子」にとっての庇護者でもあった。

ケイトは弟より30分早く生れてきたために、弟にはない信頼性とか生活力というような男性的な価値を備えていて、アントニーは頼りなさとか虚栄心とか向う見ずで無謀な点から生れる女性的な魅力を持っている。ケイトは、夜、パブリック・スクールを逃げ出したアントニーを探しに来て連れ戻し、兎の皮剥ぎをしているときナイフで左眼の下を傷つけた弟を寮母室へ見舞いにやって来る。二度と牢獄に戻らないと書き置きして、ハリエニシダの茂る共有地へ辿り着いたグリーンは探しに

来た姉のモリーに見つかって連れ戻されたのだ。

おまけに、父親が、グレアムからこの逃避行の原因がセント・ジョン寮の生活の不潔さにあると聞かされて、息子が一部の性的自慰行為常習者の犠牲にされていると誤解したため、事情聴取が寮の居住者に及ぶという間違い喜劇がもちあがる。²³

ケイトがモリーから造型されたかどうかは不明だが、グリーンは、ケイトを『情事の終り』のセアラを除いて他のだれよりもよく描写できたことに満足している²⁴と述べている。

スクープ専門の新聞記者として生活するミンティーもハロー校のタイに自己のアイデンティティーを見出している点でイギリスの伝統にたいし反逆精神を貫くことができずにいる。この20年間故国から毎月15ポンドの送金を受けてそれによって生きているからである。

アパートの5階にあるミンティーの部屋は、ベッドの上の壁に寮生の写真が掛けてあるわびしい住居である。洗面台の歯磨き用のコップの中からクモが1匹覗いているが、ミンティーはコップをさかさまにしてクモを閉じこめてしまう。そのコップの中で堪えているクモのように彼は硬いベッドに体を縮めて横になり、英国国教会の神に祈りを捧げる。彼はストックホルムで20年もクモのように堪えてきた生活者だという自覚を抱いている。

アントニーはクログの秘書兼情婦である姉の仲介により彼の用心棒として雇われる。後日、クログ社の資金操作の欺瞞を知って、それを口実にクログから多額の資金を脅し取ろうとしたが、クログにたいし中世の騎士のように忠実な部下のホールによって湖の中に溺死させられる。6歳のときに浮くかどうかを試すために父からプールへ放りこまれて以来、意識下に在り続けた恐怖の対象である溺死によってアントニーは死ぬ。

アントニーの死を引き起した直接の原因は、クログの工場に勤める父親が解雇されたことに抗議しにアンデルセンが宴会のクログの所へやって来たときに、アントニーが命令に反してアンデルセンをクログに会わせようとしたことである。アントニーが雨に濡れたアンデルセンに憐れみの情を示したのは、20年代の労働者階級が置かれた社会的状況を理性として理解したからではなく、アンデルセンの鈍重さ、誠実さ、外国語を使う能

力のなさに見られる一種の「ナショナル」に共感したからである。

アントニーは非人間的な「インターナショナル」にたいし、批判的な精神を發揮しないまま、伝統の頽廢の中に放浪者として死を迎える。

ミンティーもペンを武器として「インターナショナル」の不正を暴くこともなく異国の英国に居住者として過す。弟の死後、クローグ社を去るケイトは、ミンティーに「イギリスへ帰るんですか」と言われて「アントニーのように移転するだけですよ」と答える。彼女もまた、祖国の伝統と階級から追放された流浪者に過ぎない。このように、グリーンは30年代に海外放浪者となった「太陽の子たち」の頽廢的な群像を読者に提示する。

「太陽の子たち」が反逆の対象としたイギリスの伝統の1つはパブリック・スクールである。卒業生はみな、グレアム・グリーンのようにその不合理性を糾弾する態度を示したのではない。パブリック・スクールが「社会的な組織として事実、ダンディズムの中心として愛情をこめて検討されている」傾向がある以上、パブリック・スクールにたいする知識階級の態度はアンビヴァレントであった⁽⁶⁵⁾と言うことができる。

5

共産黨員としての経歴は後にグリーン⁽⁶⁶⁾の海外渡航に大きな障害を残すことになった。1952年2月17日、インドシナからの帰りに来日したグリーンはマッカラン法に触れて入国を拒否されたため、数時間を歌舞伎座見物と数人の関係者との会見にあてたという。平井正穂氏によると「我国の若い知識人の間で貴方の小説はかなり愛読されている、という、一種微妙な反応を示しながら、“Really?”⁽⁶⁷⁾といった」という。また氏は、当時の模様について、「私はほんのわずかだが彼と懇談したが、問題は日本の一般読者が彼の小説の示す罪の意識の問題をどう受けとめているのか、ということだった⁽⁶⁷⁾」と書いている。

この束の間の滞在の後、グリーンはアメリカ合衆国に向かったが、同じ理由で入国を拒否されたので合衆国検事総長に控訴した。『なぜ書くか』(Why do I write?, 1948)の中で作家と社会と

の関係について不忠実の勧めを説いているのは、このときのアメリカにたいする反発と無関係ではない。

6

グリーンは1923年初秋、戸棚の中から見つけた次兄レイモンドの所有物である6連発の拳銃を使って倦怠感を破るためにロシアン・ルーレットを試みる。しかし麻薬の効能と同じようにしだいにその刺激の強さが薄れるのを感じて、6回で冒険を中止する。そして万一の死に備えて、両親には事故に見せかけるために詩を机の上に残して置き、6回目を終了してから真相を語る別の詩を作った。1925年出版の『おしゃべりする四月』(The Babbling April, 1925)の冒頭の「センセーション」(‘Sensations’)は両親宛てのもので、末尾の「賭け」(‘The Gamble’)は後日の真相を述べたものである。「センセーション」は弾を銃に入れたつもりになって死を試みる点で、「片隅の戸棚の連発拳銃」(‘The Revolver in the Corner Cupboard’)の回想と微妙に違いを見せている。しかし「賭け」にあるように、死と隣り合わせになることによって生を生きるという逆説的な感覚が、第1作の『内なる人』(The Man Within, 1929)から今日に至るまでの作品群に見られるさまざまなテーマ、生と死、罪と救い、善と悪、「追う」と「追われる」を貫いていると考えられる。

(受理 1988. 11. 16)

註

- (1) Graham Greene, *England Made Me* (1935; rpt. London: The Bodley Head, 1970), p. 73.
- (2) *Ibid.*, p. 88.
- (3) Graham Greene, *Ways of Escape*, (London: The Bodley Head, 1980), p. 34.
- (4) 中村真一郎『現代文学入門』(東大出版部、1951), p. 170.
- (5) J.P. Kulshrestha, *Graham Greene* (Delhi: The Macmillan Company of India Limited, 1977), p. 43.
- (6) 見市雅俊「二つのイギリス」(河野健二編、「ヨ

- ロックバ1930年代』岩波書店, 1980), p. 187, p. 189, pp. 178-179, p. 208.
- (7) Graham Greene, *A Sort of Life*, (London: The Bodley Head, 1971), p. 132.
- (8) Martin Green, *Children of the Sun* (London: Constable, 1977), p. 27.
- (9) *Ibid.*, p. 27.
- (10) *Ibid.*, p. 33.
- (11) *Ibid.*, p. 35.
- (12) *Ibid.*, pp. 35-36.
- (13) *Ibid.*, p. 200.
- (14) *Ibid.*, pp. 201-202.
- (15) 橋口稔訳『ケンブリッジのエリートたち』(晶文社, 1988), p. 87.
- (16) Martin Green, *Children of the Sun*, p. 226.
- (17) 岩崎正也「グレーム・グリーン『自伝』(*A Sort of Life*)について」(長野大学紀要第33号, 1987), pp. 43-46.
- (18) Graham Greene, *England Made Me*, p. 11.
- (19) Michael Tracey, *A Variety of Lives* (London: The Bodley Head, 1983), p. 9, p. 15, p. 16.
- (20) Graham Greene, *England Made Me*, p. 38.
- (21) American Corporation, *Encyclopedia Americana* (New York: American Corporation, 1964), p. 543.
- (22) Graham Greene, *Ways of Escape*, p. 46.
- (23) Graham Greene, *A Sort of Life*, pp. 89-90.
- (24) Graham Greene, *Ways of Escape*, p. 37.
- (25) Martin Green, *Children of the Sun*, p. 92.
- (26) 山形和美「日本におけるグレーム・グリーン文献」(日本比較文学会『比較文学』第5巻), pp. 125-126.
- (27) 平井正穂『イギリス文学史』(1968; rpt. 筑摩書房, 1980), p. 241.